



(研究テーマ)

学びの道を創る子

～社会へとつながる言語能力の育成～

学びの道を創る子について

学びの道を創る子とは、「自律した学び手」のことである。自ら課題を見つけ、目的を持って主体的に学び方を選択・調整し、生涯にわたって学び続ける学習者と本校では定義づける。

2015年からOECDは「Future of Education and Skills2030プロジェクト（通称：OECD教育2030）」を進めてきた。2019年5月には、コンセプトノートにまとめ、そのなかで右の図の「

学びの羅針盤」も発表した。鈴木寛氏は、この「学びの羅針盤」について、次のようなことを述べている。『ラーニング・コンパスという比喻は、生徒が教師の決まりきった指導や指示を

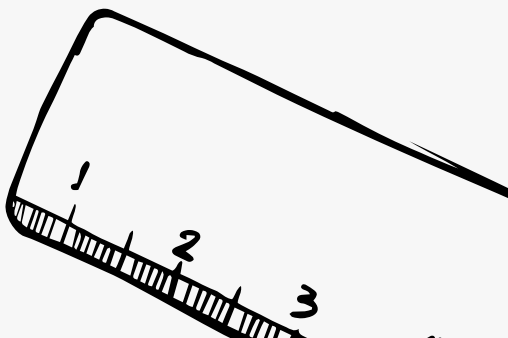
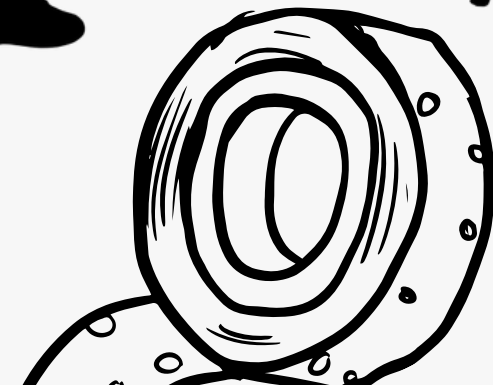
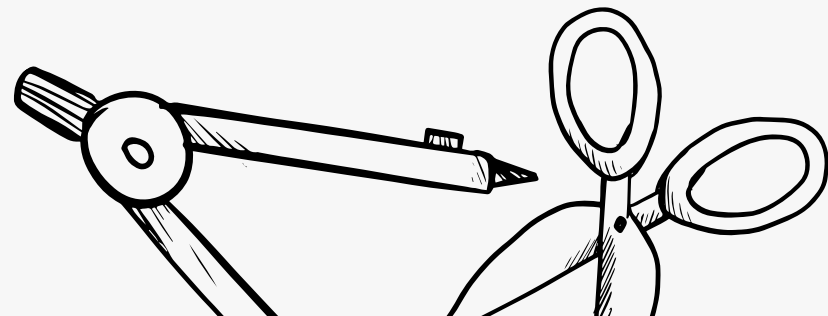
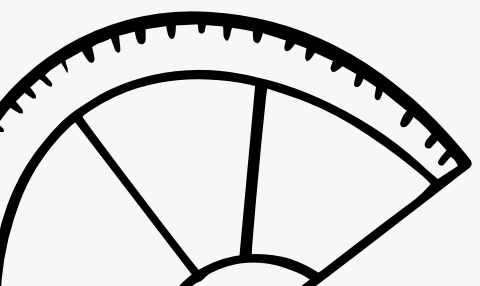
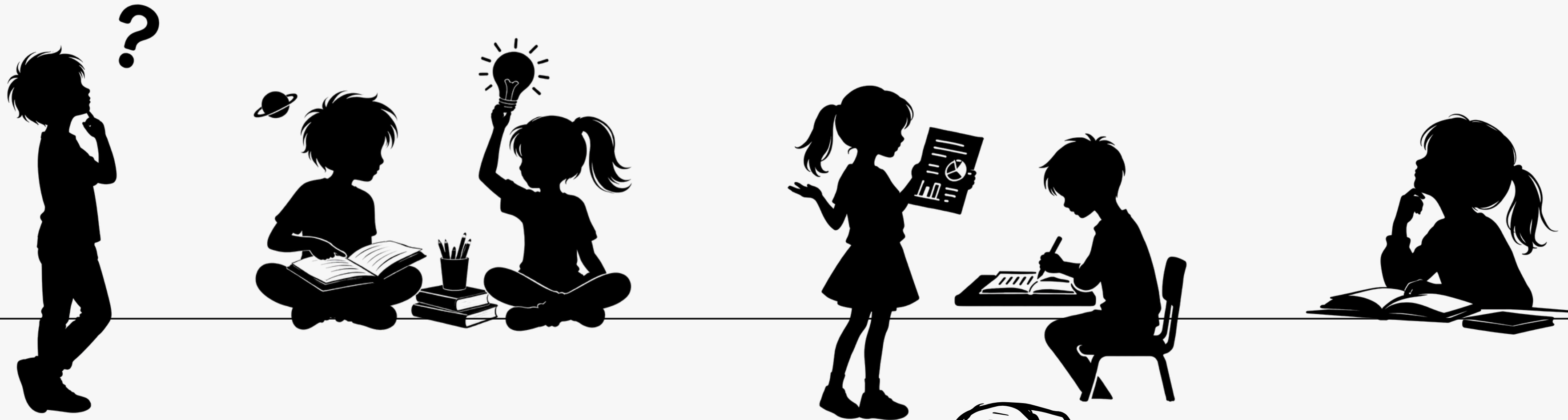
そのまま受け入れるのではなく、未知なる環境の中を自力で歩みを進め、責任をもって進むべき方向を自分で見出すことの大切さを強調するために採用された。（中略）学習プロセスとして、学習者が状況に適応し、振り返り、必要な行動を起こし、継続して自分の考えを改善していく力、つまりは、見通し（Anticipation）、行動（Action）、振り返り（Reflection）のAARサイクルの獲得を提唱している。』（『新教育ライブラリ Premier II』Vol.1 2021年4月より）

これからの時代を創るために自律した学び手を育ていくことが大切である。そこで本校では、学びの道を創る子の具体的な姿として『学びを発見する姿』『学びをつなぐ姿』『学びを表現する姿』『学びを評価する姿』の4つの姿を設定する。この4つの姿のサイクルを回すことによって、探究的に学び、自律した学び手を育成していく。



吹田市立南山山田小学校

目指す 4 つの姿



探究的に学ぶサイクル

学びを評価する姿

自分の学びを言葉で理解し、説明できる姿を目指す。自分の学びのプロセスを“見える化”できる子どもたちを育成していく。さらには、「次はこうしてみよう」「もっとこう調べたい」「疑問が新しく出てきた」という次の問いが生まれる姿も期待する。

4



学びを発見する姿

探究の本質は問いから始まる。目の前の事象から気づきを生み、その気づきを自分の言葉で問いに変え、学びの方向性を自ら見いだしていく子どもの姿を目指す。

1



学びを表現する姿

自分の考えや思考のプロセスを、言葉・行動・作品によって可視化し、他者と共有しながら学びを深めていく子どもの姿を目指す。探究で得た気づきを外に出し、他者とつなげることで、自分の学びをより豊かにしていく。

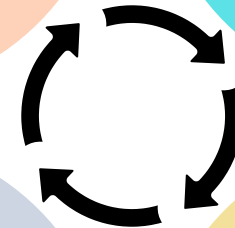
3



学びをつなぐ姿

新たな学びと、これまでの知識・経験・他者の考え・資料・社会などを関係づけ、自分なりに再構成し、意味づけていく子どもの姿を目指す。さらには友だちとつながることで学びをより充実させていく。

2



学びを発見する姿

分類・精査
問いを



導入の
工夫

子どもの問いを軸にした授業づくり

学びの出発は子どもの問いをもとにした授業づくりを目指していく。

リフレクションが有効に機能し、子どもを主体化するものは何であろうか。子どもの論理に即して考えれば、やはり子どもの主体的行為の核となる「問い」に着目したい。「子ども主語」の学びとは、「子どもが問い、子どもが自ら問いの答えを導き出し、さらに子どもが問う」学びのことである。

白坂洋一・香月正登著『リフレクション型国語科授業』東洋館出版より



学びをつなぐ姿



系統立てた授業づくり

既習事項が今の学びにどのように活かしていけるのか。系統立てた学習を大切にしていく。



教科横断的な学び

教科横断的に学ぶことにより、学びのつながりが見えてくる。カリキュラムデザインの視点に立った単元設計を行う。



学びの形態・学び方

友だちとつながり協働的に学んでいくために「一人」「二人」「三人以上」など多様な学びの形態が選択できるようにする。また、どのような学ぶのかという学び方もデザインしていく。



学びを表現する姿



学びがある言語活動

活動と学びは表裏一体である。
つけたい力を軸に言語活動を設定する。

相手意識がある言語活動

相手意識をもつことが大切である。
誰に何をとどけるための言語活動なのかをデザインする。

魅力的な言語活動

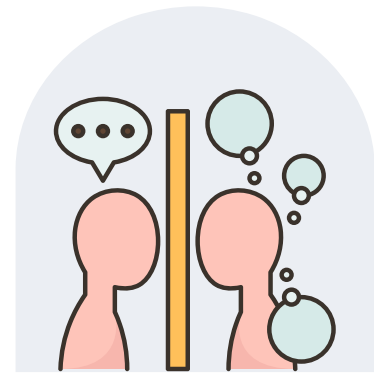
児童の「やりたい」がある言語活動を設定する。そのために様々な表現方法に出会わせることが大切である。



学びを評価する姿

問いを評価する時

- ① 決定した問いでどんな読みを発見したか
- ② どんな読み方でその読みを発見したか
- ③ 次はどんな問いで読みを交流したか



ふりかえり

観点1 学習内容（わかったこと）

- ・ 今日わかったことは何かな？
- ・ 今日の学習で大事なことは？
- ・ 「なるほど」と思ったことは？

観点2 関連付け・一般化

- ・ 前にやったことと似ていると思ったことは？
- ・ 他の場面でもつかえそうなことは？
- ・ ○○なときは、□□なんだ…と思ったことは？

観点3 自己とのつながり

- ・ 自分の考えは変わった？
- ・ 前はこうだったけど、今はこう思う？
- ・ これからやってみたいことは？

田村学（2018）では、振り返りの意義として「まとめとしての事実の確認のみならず、学んできた知識と知識を関連付けたり、既習の知識と結び付けたり、知識を新たな場面や異なる状況とつなげて活用すること」とし、その機能として次の3点にまとめられている。

- ① 学習内容を確認する
- ② 学習内容を現在や過去の学習内容と関係付けたり、一般化したりする
- ③ 学習内容を自らとつなげ自己変容を自覚する

石丸憲一（2024）「国語科における振り返りに関する一考察」

国語教育探究 37 (0), 2-9, 2024-08-01

